



121

小さく産んで大きく育てる

信州・長野県知事就任直後の2000年11月、千曲川の源流を擁する南佐久郡川上村での車座集会に向いた僕は、無人駅の小海線信濃川上駅真上に建造中のウルグ

地改良も随分と整備されているではないか。週明けにガラス張り知事室で農政部長に質します。

すると事も無げに返答。「首都圏への高原野菜の安定供給に不可欠な公共事業。高さ78メートルの橋脚2本を一跨ぎする『上部工』橋桁』も発注済み」と。

当初予算19億円。その段階で3倍強の68億円にも膨れ上がっていた予算書の同年度分に、発注済み『上部工』の金額は見当たりません。訝ると、「債務負担行為』で次年度に『表返し』しますから心配無用。しれっと答えます。

国や自治体の予算は単一年度で完結するのが原則。一方、単年度で終了せず、次年度以降も負担支出が求められる公共事業に於いては、後年度の債務負担を『官』が約束する『性善説』に則り、『民』は発注の橋桁を製造中。

「官は倒産しない神話』の流儀。一度走り出したら止まらぬ追加予算三兄弟『ダム・隧道・橋梁』別の苦い思い出も蘇ります。

「山肌を削り取り、樹木を切り倒し、『明かり部』を設けて道路を建設するよりも、環境に配慮した隧道の方が知事らしいではありません。

せんか」。

その甘言に絆され、当初予算で決裁すると程なく、土木部長がガラス張り知事室へ駆け込んで来ます。「想定外に脆弱な地質に対応すべく、掘削費用の増額を補正予算で計上させて頂きます」と。

需要の変化や景気状況に応じ、途中で一旦休止する選択も可能な道路建設と異なり「三兄弟」は、途中で事業を中止したら投資効果ゼロ。竣工まで予算が際限なく増大していく蓋然性を伴います。

往時44歳の決裁する僕に部長は教示下さいました。「知事、公共事業は『小さく産んで大きく育てる』ものです」。

岐阜県の本曾川水系揖斐川に建設された徳山ダム。「もはや戦後ではない」と『経済白書』が記した翌年の1957年『昭和32年』に発表。日本万国博覧会『大阪万博』翌年の1971年『昭和46年』着手。計画から51年後の2008年

『平成20年』に竣工。消滅した8集落・466戸・522世帯を描いた映画『水になった村』の徳山村は、ダム湖の湖底に眠っています。

特別天然記念物イヌワシやクマタカ営巣地への影響を最小限に食

い止めるべく建設機材に保護色を塗装。加えて、環境に配慮した隧道を含む周回道路の建設費が高み、1976年時点で330億円、1985年に2540億円、最終的には3550億円に膨れ上がりました。

閑話休題。「215」と「2150」。どちらの数字が大きいですか？ 子供でも回答可能な「正解」は、行政機関に於いては「誤答」。公共事業は単位百万円、一般事業は単位千円で予算書に記載され、前者は215,000,000円。後者は2150,000円の『視覚的詭計』。

庁舎内の食堂で530円の昼定食を摂った土木部職員は215と計算機に打ち込む際にマアこんなもんかと。福祉部職員は2150をデカいなあと錯覚。政府も自治体も、公共事業と一般事業で単位が異なる予算書。

往時の電子式卓上計算機には「億」「万」キーが存在。前者を2億1500万円、後者を215万円と記載する信州独自の予算書仕様に改め、1円単位からの意識改革「増税なき財政再建」を敢行。

無論、小生の退任後は元の木阿弥な長野県ですが（苦笑）。

★次号5月号の発行日は4月29日(金)です。